



a man with NO mission ⑤

- 41 バンド (985字)
- 42 野次馬 (588字)
- 43 空き地の出来事 (1177字)
- 44 電信柱 (1048字)
- 45 日射し (436字)
- 46 分裂病 (286字)
- 47 500円貯金 (510字)
- 48 監視 (760字)
- 49 名所 (468字)
- 50 息子 (1468字)

イラスト・いぬ36号

## バンド

---

ふと手に取った音楽雑誌でバンドメンバー募集の広告を見つけた。楽器経験のない素人でも歓迎で、どんな音楽をやるかは集まったメンバー次第だとあった。

男はこれこそ自分が探していたバンドだと直感し、さっそく連絡した。すぐに採用が決まった。

集まったメンバーは五人だった。最初のミーティングでそれぞれの担当楽器を決めた。目立つポジションがよかった男は、ギターならコードをいくつか押さえられると主張した。すると、タンバリンをあてがわれた。革を張ったタイプのタンバリンだった。他はギターが二人、ベースが一人、パーカッションが一人だった。

バンド結成を呼びかけた、ベース担当のリーダーが男に言った。

「このタンバリンをギターのように鳴らしてくれ。きみのポジションはいわばサードギターだ。きみはこのバンドを影で支える重要なメンバーだ」

影で支えるという部分が気に入った。

男は個人練習にのめり込み、タンバリンを使って生まれて初めて曲を書いた。タンバリンだけでどうやって曲が書けたのか、本人にも分からなかった。

男は興奮が冷めやらぬうちにみんなに曲を聴かせた。メンバーたちは最後まで聴いたあと、揃って沈黙した。男は感動で口も聞けないのだと思った。ヒットを確信し、この曲でデモテープを作ろうと誘いかけた。メンバーたちはぱらぱらと相づちを打った。

バンドの活動場所は市民球場の無料で入れる外野席だった。あるとき、痛烈なライナー性の打球が外野席に飛び込んできた。男はとっさにタンバリンで跳ね返そうとした。うまくいかなかった。ボールは革を突き破って顔面に直撃した。男は気を失い、メンバーたちはホームランを打った選手に喝采を浴びせた。

「運び込まれたとき、これも一緒に」

看護師が男の枕元に革の破れたタンバリンをそっと置いた。胴回りの小さなシンバルがちゃっと音を立てた。

「バンドやってるんです」男は沈んだ声で言った。

「すごい。じゃあタンバリンを――」

「ギターです」

「え？」

「サードギター」

看護師は意味が分からないと言いたげな表情を浮かべたが、それ以上何も言わなかった。

青春は終わった。男は壊れた楽器を見てそのことを悟った。それを証明するように、メンバーに連絡してももう電話は通じなかった。四人ともだ。

男は枕に伏せてむせび泣いた。自棄になって壊れたタンバリンを投げつけると、それは壁で跳ね返り、男の顎に当たって床に落ちた。

男は火事を見物することが何よりも好きだった。燃え盛る炎を見ると、体中からアドレナリンが吹き出して異常に興奮するのだ。より広い面積を焼く、被害の大きい火事ほど興奮は高まった。

消防車のサイレンを耳にすると、男はいてもたってもいられなくなり仕事を放り出して現場に駆けつけた。

いつも最前列で鎮火まで見物するので、男の髪の毛は常にちりちりだった。近くで食い入るように炎を見つめるため、目も焼けて視力も落ちる一方だった。ついにはほとんどものが見えなくなってしまった。

それでも男は火事場見物をやめられなかった。肌で炎を感じようとしてますます火に近づくようになったのだ。

あるとき、男は川向こうで起きた二階建て木造住宅の火事の現場に駆けつけた。規制線の最前列で火の粉と灰を浴びてうっとりしていると、燃え盛る建物から火だるまになった犠牲者が飛び出してきた。

犠牲者が助けを求めて突っ込んでくると、野次馬たちは蜘蛛の子を散らしたように逃げ出した。目の見えない男は一人逃げ遅れた。男は犠牲者に抱きつかれ、もろとも火だるまになった。

男は自分でもわけが分からないまま叫び声を上げたが、それは苦痛と歓喜の入り交じったものだった。気がつくや、男は二度と離すものかと言わんばかりに相手をきつく抱き返していた。

二人の頭上に炎が渦巻いた。男は途切れることなく苦痛と歓喜の入り交じった声を上げ続け、立ったまま焼かれた。

裏通り沿いにある空き地に、半ば草むらに埋もれるようにして木箱が打ち捨てられていた。ビールケースくらいの大きさのみすぼらしい箱だった。粗大ゴミまがいのものだったが、不思議と目を引くものがあった。

空き地は人目につきにくい場所で、木箱はしばらくそのまま放置されていた。男は前を通りかかるたびに気にして目をやった。木箱がまだあることを確かめるために、わざわざその道を通ることもあった。

あの箱には何か秘密があるのではないか。そんな気がして仕方なかったが、近寄って中身を確認するのは憚られた。男には木箱が自分を呼んでいるようにも感じられた。

数日後、大雨が降った。男はこのときを待っていたかのように、レインコートに身を包んで例の空き地へ向かった。この雨なら誰に邪魔されることもないだろう。男は周囲に人通りがないことを確認すると、おもむろに草むらに足を踏み入れた。

木箱は変わらずその場にあった。植物が成長したせいで、以前にも増して草に埋もれているように見えた。上部に蝶番のついた蓋があり、鍵はついていなかった。雨に濡れているせいか遠目に見るより重々しい印象で、どこかゲームに出てくる宝箱を思わせるところがあった。

男はごくりと唾を飲み込むと、恐るおそる腕を伸ばして蓋に指をかけた。

そのとき、中で何かが動く気配がした。

男はびくっとして思わず手を引っ込めた。

中は空ではなかったのだ。何となくそんな予感はしていた。だが、一体何が入っているというのか。何か生き物が閉じ込められているのか。それとも――。

再び木箱に手を伸ばすと、指先がわずかに震えた。ここまで来てやめるわけにはいかなかった。男はごくりと唾を飲み込むと、一思いに蓋を開けた。

中から猛烈な勢いで何かが飛び出し、男に襲いかかった。男は声にならない悲鳴をあげて後ろ向きに倒れ、尻餅をついた。あわてふためいた男は、そのまま這いつくばるようにして濡れた草むらの上を逃げた。驚きのあまり腰が抜けてしまっていた。

追撃はなかった。男は木箱から数メートル離れたところまで来ると、正体を確かめるために恐るおそる後ろを振り返った。途端に謎が解けた。

それぞれ別の方向を向いているぎょろりとした大きな目玉、べろんと垂れ下がった長い舌、つんと突き立つ数本の硬い毛、手を模した棒と軍手一一。

手製のお化けの縫いぐるみを取りつけた、バネ仕掛けの飛び出すおもちゃだった。今まで見た中でも一番大掛かりなやつだ。

男は腹の底から抜けていくような安堵を感じた。それとともにパンツの中に生温い不快感が広がった。ちびってしまったのだ。

立ち上がることもできないまま呆然とお化けの縫いぐるみを見つめていると、次第に己の失態が客観的に理解されてきた。男の顔が雨の中でもはっきり分かるほど赤く染まった。男はレインコートについたフードで顔を隠すようにして空き地から走り去った。

男はかねてから興味があった市民劇団に入った。

初めての舞台で与えられたのは電信柱の役だった。顔の部分を丸くくり貫いた筒状の衣装に身を包み、上演中じっと身動きしないでいるのだ。台詞はなかった。

初心者ながらも精一杯やると、みんなから褒められた。きみのように電信柱の役をうまくこなせるやつなんて他にいない。今まで見た中で最高の電信柱だ。

散々おだてられたあと、気がついてみると男は衣装を着たまま道端に立たされていた。

「さあ、これを持って」

演出家はそう言って男に架線を握らせた。

「それを高く掲げて。そう。そのまま動かない。きみは電信柱なんだから。これは最高の栄誉だぞ。何しろ演技でやっていたものが本物の仲間入りをするんだから」

男は電信柱として道に設置された。

一時間もしないうちに架線を掲げ持つ腕がふるふる震え出した。男は役をまっとうしなければという責任感から何とか持ちこたえた。

前と後ろには本物の電信柱が立っていた。少しでも気を緩めれば架線が地面についてしまう。そうなれば電信柱の名折れだ。そんな失態を演じるわけにはいかなかった。

役になりきるのだ。男は自分にそう言い聞かせた。腹が減っても尿意を催しても、電信柱がそんなものを感じるはずがないと一蹴した。

だが、どんなに気張ってみても時間とともに意識が朦朧としてきた。やがて幻覚や幻聴にも襲われはじめた。それでも自分の役を演じ切ると心は折れなかった。

立ったまま何度か失神しながら、なおも踏ん張っていると、あるときふいに一線を越

えた。意識が完全に電信柱に同化したのだ。

男は今や電信柱だった。もう何も辛くなかった。意識しなくても体が自然に電信柱になるようになったのだ。

雨の日も風の日も、男は微動だにせずにとだそこに立って架線を掲げ持った。

通りすがりの誰も、それが電信柱ではなく人だということに気がつかなかった。犬猫や鳥や虫たちさえ、それが本物の電信柱であるかのように振る舞った。

ときどき演出家が道を通りかかった。演出家はいつもガムをくちやくちや噛みながら、男に目もくれずに通り過ぎていった。

男にその場所にいるよう命じた者の目にさえ、もはやただの電信柱としか映らなくなっていたのだ。男は役者の道こそ己の天職だと悟った。

ちょうどその頃、区議会で男が立っている道沿いの電信柱を地中化する計画が承認された。

計画は直ちに実行に移された。

何台もの工事車両がやってきた。作業員たちの誰一人としてそれが本物の電信柱ではないということに気がつかないまま、男は地中深くに埋められた。

## 日射し

---

強い日射しを浴びているうちに体が溶け出してしまい、気がついたときには男はスライム状の生命体になっていた。たいして不都合はなかった。男は、骨も関節もないこの体なら、どんな狭い隙間でも通り抜けられそうだとぼんやり思った。

真っ先にひらめいたのは女子更衣室に侵入することだった。思考も単純化され、いったん思いつくと頭の中はそのことだけになった。

男はドアについた足元の通気孔から更衣室に侵入した。あっけないほど簡単にいった。おっぱいを求めて辺りを見回すと、ちょうど今下着をはずしたところらしい女の子が一人でいた。もってこいの肉付きだった。

男は伸びあがるようにして女体に飛びかかった。床に押し倒すと、相手は手足をばたつかせて抵抗した。それも最初のうちだけだった。女の子は男のひんやりした肌の感触を気に入ったらしく、むしろ積極的に行為に参加してきた。

男は男でいつも以上に密着度の高い感触に感動を覚えていた。二人はぴたりとくっつき合ったまま床の上で愛し合った。

それは素晴らしい時間だった。

## 分裂病

---

ビルの屋上から飛び降りて地面に激突すると、男は千体に分裂した。あわてた千体の男たちはもう一度死のうとして同じビルから飛び降りた。地面に激突すると同時に、千体がまたそれぞれ千体に分裂した。

男の数はあっという間に百万体に膨れ上がった。その一方で、死にたいという気持ちは何一つ変わらなかった。百万体の男たちは、またしてもビルから飛び降りた。心のどこかでどうせまた死なないのだろうとたかをくくっていたが、今度は全員死んだ。

死体を片付けるのは強制収容所よりも大変だった。土の中から新たな男たちが生まれた。一体の男から一体ずつ、百万体の男たちだ。彼らは皆、生まれたそばから死にたかった。

## 500円貯金

---

男は昔やった500円貯金のことを唐突に思い出した。あの貯金は一体どうしたんだっけ。使った記憶はなかったが、どこにやったのかいくら考えても思い出せなかった。

男は部屋をひっくり返して貯金箱を探した。側面に「10万円貯まる！」と大書きされた缶型の貯金箱だった。半分以上貯まっていたことは間違いない。とすれば、五万円は下らないということだ。

男は押し入れの奥を漁りながら、最後に見たのはいつだったかを必死に思い出そうとした。八年前に引っ越しをしたときか。あるいは五年前に家電を買い換えて部屋のレイアウトを一新したときだったか。

家中を探しても貯金箱は出てこなかった。過去に付き合った女たちの誰かがこっそり持ち出したのではないかと疑い、男は一人ずつ電話をかけていった。全部で二人だった。どちらもつながらなかった。

男は難しい顔になって座り込み、もう一度記憶をたどり直した。すると、ある日の出来事に行き当たった。ほんの戯れに、頭に貯金箱を乗せたままいつまで落とさないでいられるか試してみようと思ったのだ。することがなくてあまりにも暇なときに思いついた遊びだった。

もしやと思い、男はそっと自分の頭の上に手をやってみた。貯金箱はそこにあった。

男の仕事はある人物を監視することだった。もう何年もその仕事に従事していた。誰のためにやっているのかも、何のためにやっているのかもよく分からなかったが、好きな仕事であることに間違いはなかった。

対象は通り向かいに住んでいる人物だった。そのため、家にいながらにして仕事ができる。男は自室の窓際から片時も離れることなく、通り向かいの家を眺めて毎日を過ごした。

朝から夜まで休みなく監視を続けると、一日の終わりには几帳面な字で日報を書いた。この仕事のもっとも好きな部分だった。報告すべきことがないときでも、同じ文面にならないように工夫を凝らした。報告するに足るような出来事はなかなか起きなかった。

ある年、男は病に倒れた。薬の副作用で常時痺れるような痛みと吐き気に襲われるようになったが、それでもベッドを窓際に持って行って仕事を続けた。病状は重かった。やがて末端が壊疽しはじめ、両手足を切断しなければならなくなった。男は不屈の闘志でこれを乗り越えようと、すぐに仕事を再開した。日報はペンを口でくわえて書いた。

その後も病気は無慈悲に進行した。視力が次第に衰えていき、ついには何も見えなくなってしまった。男は、それでもなお研ぎ澄まされた勘を頼りに監視を続けた。

ある日、男の部屋に死神が訪れた。男はもう一日待ってくれ、もう一日待ってくれと言って、最期のときを限界まで引き延ばした。死神は一日につき歯を一本もらい受けることを条件に手を打った。その間も、通りの向かいの部屋では報告するに足るような出来事は何一つ起きなかった。

男はついに息を引き取った。日報を書こうとしてペン立ての上に倒れ込み、ペスが顔中に突き刺さったのが直接の死因だった。

男は、死んだあとも地獄の底から通りの向かいの部屋を監視し続けた。その部屋はとっくの昔に空き部屋になっていた。

男は週末のたびに海岸沿いにある大きなレストランにやってきた。

そのレストランの駐車場からは、少し離れたところに海に突き出るようにしてできた切り立った崖が見えた。自殺の名所として知られる崖だった。

男はレストランで食事をするわけではなかった。崖の方に向けて車を停めたまま、ただ車内で音楽を聴いてじっとしているのだ。そうして崖の上に人影が現れるのを待つのである。

何時間も無為に過ごしたあと、ようやく人影が現れると、男はわずかに身を乗りだして成り行きを見守った。

たいていの場合、志願者はすぐに決心するということはなかった。男は遠く離れた車の中から、片目をつぶって人影に焦点を合わせ、人差し指で背中を押す真似をして遊んだ。

何回かに一度、本当に人が身投げする場面に出くわすことがあった。

そうすると、男は車から降りて海面が見える柵のところまで行き、落ちた人が二度と波間に浮かび上がらないことを確かめるのだった。

しばらくすると、男は再び車に戻り、また音楽を聴きながら次の志願者が現れるのを気長に待った。

帰り道のハンドルを握る男の顔は、いつもにやけていた。

## 息子

---

ある日、男の前に息子を名乗る人物が現れた。思い当たる節はあった。男は、かつて一度、ある女と情を通じたことがあったのだ。

暑い夏の日ので出来事だった。

男がデパートで買い物をしていると、通路の奥の方から何かうめき声のようなものが聞こえてきた。ひょいと覗くと、トイレの手前のところに髪が長い女が苦しそうにうずくまっていた。大丈夫ですかと声をかけた途端、その女は豹変し、男の手を掴んで女子トイレに引きずり込んだ。

そのあとの出来事はまるで嵐のようだった。女とはそれきりで名前も知らないままだった。あのときに子供を授かっていたなんて、男は知りもしなかった。

息子と一緒に住みたいと言われると、男は断ることができなかった。

奇妙な共同生活が始まった。

生活時間の違いから、二人が顔を合わせることはめったになかった。そうでなくても息子は部屋にこもりがちで、学校に通っているのか働いているのかも不明だった。

男の家で奇怪なことが起こるようになったのは、それからまもなくのことだった。

天井裏から何か大きな生き物が這い回るような音が聞こえてきたり、郵便物がびりびりに千切られて庭に散乱していたり、風呂場に蛇の死骸がぶら下げられていたりするようになったのだ。

男は何か心当たりがあるのではないかと思い、息子がトイレに入った隙を捉えてドアの前で待ち構えた。待てど暮らせど、息子は出てこなかった。諦めかけたそのとき、突然、トイレとは逆方向にある居間の押し入れが開き、そこから息子が何食わぬ顔で出てきたのだ。男は言葉を失って部屋に戻っていく息子の背中を見送った。

数日後のある晩、男は息子と台所で鉢合わせた。息子は練乳のチューブに直接口をつけてちゅうちゅう吸っていた。自分に似たかとも思えるようなその悪癖に、男は胸を締めつけられるような思いがした。その一方で、改めて顔をよく見ると、息子は自分とたいして変わらない年齢のようにも見えるのだった。

男は、ふと気になって母親が今どうしているのか訊ねてみた。息子は風俗に売り飛ばしたきりあの女とは会っていないと答えた。もう日本にはいないだろうということだった。息子は母親を売った金で上等の鰻を食べたと言って笑った。

また別の晩、男は風呂上がりの息子の背中に大きな傷跡があるのに気がついた。それはどうしたのかと訊くと、息子は暗い目になって戦争で受けた傷だと言った。どの戦争か見当がつかずに重ねて訊くと、息子はむっつり黙り込んでそれきり口をきかなくなった。

日ごとに男の家から物が一つ、また一つと消えていった。どうやら息子が持ち出して質に入れるかどうかしているらしかった。男が問いただすと、息子は突如地の底から響くような声で笑い出し、やがてむせ返って息をつまらせた。少し休んで呼吸を落ち着いた息子は、「貴様おれを殺す気か」と言って男を責めた。

男が出張で数日家を空けたあと戻ってくると、家は見ず知らずの大勢の若者たちによって占拠されていた。男は、若者たちの間を分けいるようにして探し、ようやく空の浴槽にうずくまって何事かぶつぶつ呟く息子を見つけ出した。彼らに出ていくように言ってくれと頼むと、息子はこの家は神に捧げられたのだと言って浴室にゲロをぶちまけた。

男はそのまま旅に出て、二度と家に戻らなかった。

旅の途中で、あの女と出会った例のデパートにふらりと立ち寄った。思い出をたどろうとして女子トイレに足を踏み入れると、あっという間に警備員に取り押さえられた。床に組み敷かれながら、男は悔恨の涙を流した。警備員は気持ち悪がって男を滅茶苦茶に殴りつけた。

了